

# 新生中国のキー・パーソン 周恩来

## 周恩来こそ一貫した「毛沢東批判者」では？

「毛主席万歳！ 万々歳！」と絶叫する周恩来。だが、彼こそは一貫した「毛沢東批判者」ではなからうかと、中嶋 嶺雄氏（東京外国語大学助教授）は大要次のように語る。

政治的な情勢に応じて絶えず流動化することは周知のとおりである。

こういう現状の中では、常に中国のリーダーの政治感覚が、ストレートに外交に反映せざるをえないわけである。たとえば、周恩来が感じたことが、そのまま外交政策に翻訳されてくるという特徴がある。

膨大な官僚機構というものを持っている国であれば、その政治指導者のいわば恣意的というか、あるいは思いつきの政策というものは、必ずいろいろなところでチェックされるという形で、一種のフィードバックがなされることになる。こういうことが中国にはないわけである。そこで、中国の場合はどうしても指導者に注目せざるをえなくなる。

もう一つは、マス・メディアの問題であるが、

中国の場合は、わが国と根本的に違う。唯一のマス・メディアである「人民日報」は、いわば党の政策的なプロパガンダ（宣伝）である。だから国民の世論などが、政府の外交政策にハネ返って、いろいろな影響を与えるというケースは全くないわけである。

こういう点だけを考えてみても、中国における内政がいかに外交政策を規定するかということがわかるであろう。

最近の中国の外交政策は、わが国との関係のみだけでなく大きな変化をみせている。たとえば、昨年九月に行なわれた日中国交回復以来、それまでの「日本軍国主義を打倒せよ」とか、「米日反動派を打倒せよ」といっていた言葉や表現は消えうせてしまった。そして今日では、日米安保体制に対する批判も全く影をひそめ、むしろ日本の現

### 指導者の政治感覚が、即外交政策に反映する中国

中国の対外政治は、国内の政治の内容を反映していることはいうまでもないが、特に中国の場合、外政と内政との相互関係というものが著しく強い。ある意味では、文字どおり内政が外交を規定するということがあてはまるわけである。

これにはいろいろな理由が考えられるが、その一つは、中国にはまだわが国にみられるような膨大に組織化された官僚機構というものがなく、しかも、この官僚機構が、わが国に比べてはるかに小さいものである。しかも、こういう機構そのものも、



さて、一九六六年の秋といえば、全中国が最も激しく揺れ動いていた時期である。いうまでもなく、文化大革命（文革）が開始され、紅衛兵が街頭を埋めつくし、激しい党内闘争（権力闘争）が展開されていたときである。

### 文革は一応終息したが、その本質は いったいなんだったのだろうか？

状を肯定するのみか、ある意味では、わが国の政財界との接近を著しくはかっていることはすでに周知のとおりである。

こういう中国の激しい外交政策の振幅というものを考えていくと、いったい誰がこのような政策的な課題を担っているのだろうかということに着目せざるをえないわけである。そしてその場合、ある意味では柔軟で現実的な政策を打ち出せる人物として、いうまでもなく周恩来がクローズ・アップされてくるわけである。

当時、毛沢東の権威というものは非常に高かったが、しかしながらその政策実行においては、むしろ反対派が党の多数を占めていた。したがって文革そのものは、毛沢東による起死回生の権力奪還闘争であったといえよう。そして、この権力闘争のパターンを、従来とは全く異なるところの党外の大衆闘争というものに依拠していくわけである。この段階において動員されたのが、紅衛兵であった。紅衛兵は、一つの運動の起爆剤として大きな役割を果たしながら、やがてそれ自身、非常に無定形な方向に走り出すと、これをチェックするために、林彪が全面的に指導権を握っていた人民解放軍が投入され、奪権闘争を遂行していったわけである。

こういう過程を経て考えてみると、文革というのは、党内闘争を大衆運動化させるという、非常に毛沢東らしい政治パターンをとったわけであるが、あれほどの激しい大衆運動を展開したにもかかわらず、今日、文革で掲げられたスローガンはほとんど定着しなかった。それどころか、当時の造反運動などのスローガンさえも、今日の中国ではもはやみることができなくなった。ただ、実権派を打倒するという点において、毛沢東は成功しただけであり、制度的に変化したものはないもなかったわけである。

その後、中国共産党九全大会において、文革の路線に乗ったふうな形で、毛沢東および林彪を中心にした新しい毛林体制というものができたかと思われた。ところが、これはまたたくまに崩壊してしまった。文革の造反運動などで重要な役割を

果たし、九全大会でも一番組長であった陳伯達以下全員が失脚してしまった。残ったのは、ほとんど毛沢東の側近グループと、林彪国防部長をはじめとする軍の首脳であったが、これらの人たちは、一昨年九月の林彪事件に連座して全部ついで去ってしまった。

林彪にいたっては、九全大会では毛沢東の後継者として党規約の中に指名されたにもかかわらず、こともあろうに毛沢東を暗殺しようとしたという、これまでの歴史にない最悪の極悪者として追放されてしまった。その後、林彪は毛沢東暗殺計画を企てて、それに失敗し、ソ連に逃亡しようとして、モンゴル上空で墜落したという筋書きが公表されたわけである。もとより、この林彪事件については、非常に解明すべき点が多いが、文革の功績ゆえに膨大な圧力を持ちはじめた軍に対する党官僚、あるいは行政官僚の一種の予防クーデターではないかと考えざるをえない。

このような経過をたどって、文革は一応終息していくわけであるが、ここ数年の中国というものは、まさに文革というものの後遺症に悩み抜いてきた感がある。

国家民族の一〇〇年の大計といわれたこの運動も、なんら定着をみせずに終わってしまった。しかも、先頭に立ってそれを指導してきた人たちがすべて失脚してしまう。そして、その後の事態をみていると、先ごろの鄧小平の復権にみられるように、実は文革で批判された人たちが、特に大物の復権が相次いでいるわけである。

こういう経過をたどっているだけに、今日の中

国では、すでに文革というの是一场の悪夢として忘れ去ろうというふんい気さえみられる。そうならば、いったい文革というものはなんであったのかという疑問を持たざるをえなくなる。

私は、ある意味では文革の收拾から今日における脱文革、あるいは文革否定という一貫した流れは、実は周恩来の指導力によるものではなかったかと感じざるをえなくなっている。

### 周恩来の叫びには、なにか計算された演出の二オイが……

周恩来は、中国革命のときからさかのぼって考えてみても、毛沢東的政治や毛沢東的革命というものももたらす、ある意味でのリスクとそのロスというものを、つねに尻拭いしてきた人物であった。そして、周恩来は非常に冷静に沈着に行動している。こういう周恩来であるからこそ、毛沢東のああいう熱狂的な文革にしても、それはある意味では、周恩来の遠大な構想の中の一コマとして終わるようなドラマになっていくのではないかという気さえはじめている。

私は、周恩来については非常に印象深い想い出がある。文革が最高潮に達していた一九六六年の十一月二日、北京の人民大会堂では孫文生誕一〇〇周年記念という行事が盛大に行なわれ、私はたまたまそれに出席していた。

この行事は、本来、中国にとっては非常に重要な国家行事の一つであって、従来ならば国家主席である劉少奇が主宰するはずであった。事実、一

年前に発せられた招待状には、劉少奇の名前が書かれていたわけであるが、当時、文革によってその批判のほこ先が劉少奇に向けられるのではないかということが推測しうるような時期にあたっていた。

当日、私たちが人民大会堂の控室にいるとき、孫文が生前、非常に日本と関係が深かったということで、わざわざ周恩来や孫文未亡人の宗慶齡女士、さらにはこの間来日された廖承志などをはじめとした中国の首脳者がすべてあいさつにきてくれた。だが、そこには劉少奇と鄧小平の姿はなかった。

ヒナ壇には、劉少奇や鄧小平も並んではいるが、新華社のカメラマンは、この二人のところだけにフラッシュの放列をあげせることを避けていた。これはあとから判明したことであるが、劉少奇あるいは今回復権した鄧小平が、文革で批判される前に最後に公開の場に出た、その一コマであったわけである。

こういう時期に、周恩来は総理として演説していたが、非常に周囲に気を使い、いかに毛沢東が偉大であるかということ、彼の演出によって盛りあげていた。そして、演説の最後に「毛主席万歳、万々歳」と叫んだその姿は、たんに儀礼としての賛辞ではないばかりか、どこか緊張でふるえ、なにかただごとではないかのように、いささかカン高く、うわずってさえ聞こえた。

私は、周恩来ほどの人物が、目の前でこれほどまでに真剣に叫んでいるの聞き、中国の政治的現実の厳しさに慄然とするともに、一方では、

その叫びのどこかに、周恩来は、どうもなにか演じているのではないかとすら思われた。

### すべてを知りつくして、なお毛沢東に賭けた周恩来

文革が開始された当初は、周恩来はどちらかといえば、毛沢東的な考え方よりは劉少奇的な考え方に近かったわけである。もともとこの人は、あの意味では現実主義者であり、合理主義的なものの方を見方をする人である。その証拠に、文革の初期は、毛沢東グループとは共に行動していない。しかしその後、文革がだんだんと本格化してくる時点から、彼は毛沢東にすべてを賭けることを決意し、その賭けのために日夜身を呈して飛び回りはじめている。そこでは、総理としてやるべきことではないことまでも面子を捨ててやるという徹底した毛沢東への献身ぶりである。それが先ほどの「毛主席万歳、万々歳」というような演出にもなっていたわけである。

このようにみえてくると、周恩来自身には、すべてを知りつくしながら、なおかつ毛沢東に賭けていくという、なにか遠大な計算がなかったであろうかと思う。

もとより、その答えは「毛沢東以後」の時代になつてはじめて明らかにされるであろうが、なぜ私がこのような見方に固執するかといえば、周恩来こそ、もしかしたら一貫した「毛沢東批判者」ではないか、という直感的なひらめきにとりつかれているからである。

考えてみると、周恩来は文革後、むしろいわば文革を否定するような方向を指示している。今日では、毛沢東体制の下で、毛沢東の権威というものを象徴化していくような路線がみうけられる。それは、かつて毛沢東批判をやった彭德懷や劉少奇、さらには林彪などが、非常にみじめな運命をたどったということなまなましくみているだけに、非常に巧妙なやり方で行なわれているように思う。

周恩来は、カリスマティックな指導者である毛沢東をまつりあげながら、一方では、実際にこの指導者の政策を形骸化しているのではなからうかという気がするわけである。

**批判されながらも、常に最高指導者の立場を堅持**

周恩来は、毛沢東とは年齢的に五つ違う。毛沢東は今年の一二月で満八〇歳になる。周恩来の生年については、さまざまな説があるが、一応信頼性のある一八九八年説をとると、現在七四歳である。

中国は、非常に政治的な動きが激しい国である。そこで、仮に毛沢東がなきあと、いったいどうなるのかということが世界の関心事になってくる。毛沢東を失った中国は、確かに中国の民衆にとっては非常に衝撃であり、また中国はみじめになると思われるが、これには二つの方向が考えられる。

一つは、周恩来をはじめとする政治的な指導者

によって、意外にその困難を乗り切っていくという可能性である。ところが、逆に周恩来の指導力が必ずしも十分でなかった場合に、ものすごい混乱に陥るといふ可能性も否定することはできないだろう。

私は、毛沢東が死んだ場合よりも、周恩来が先に死んだ場合は、もっと中国は困ったことになりはしないかと思っている。

というのは、今日の中国が必要としているのは、毛沢東を英雄としたあの「革命中国」の顔ではなく、国際化時代に柔軟に対処していくリーダーシップであるからだ。その意味では、毛沢東の時代はすでに終わったといえるかもしれない。すでに今日の中国が国際化時代を迎えようとしているだけに、広い国際感覚を持ち、柔軟な方向感覚を持っている周恩来の存在がますます重要になっていくからである。

しかも、周恩来は毛沢東と違って、中国革命の出発当初から終始一貫して重要なリーダーとして登場している。

中国革命をふり返ってみると、毛沢東は一九三五年に、中国共産党遵議会議という非公式の幹部会ではじめてその指導権を確立したといわれている。しかしその後、文革の直前の数年間というものには、実権派に実際の政治の第一線をゆだねざるをえなかったのにくらべると、周恩来は、毛沢東以前から党中央の位置を占めていた。

周恩来は、一九一九年に天津の学生運動のリーダーとして「五四運動」の先頭に立ち、二一年に中国共産党が創立されたのちは、「勤工儉学」運

動の留学生としてドイツやフランスに渡って中国共産党の支部をつくり、帰国後は、のちに林彪、徐向前ら中国紅軍の英雄を輩出させた黄埔軍官学校政治部主任代理となるなど、ある意味では毛沢東以上にはなばなく活躍している闘士である。

その後、周恩来は一九二七年の中国共産党五大会で中央委員となってからは、一貫して軍事面での最高指導者の地位を占めてきた。やがて、毛沢東路線が確立して、従来の路線が批判されたとき、周恩来は批判されながらも生き残り、毛沢東路線の中でもやはり重要な役割を果たしていくわけである。そして、文革の過程で数多い指導者が失脚したにもかかわらず、周恩来は依然として最高指導者の一泓を担ってきたという人物である。

このような周恩来のキャリアをさして、よく「起き上がりこぼし」と中傷するむきもあるが、私は、そういう言葉ではいいつくせない周恩来の持つ政治力が作用していたように思うわけである。

**多くの危機を救った、すぐれた外交的手腕**

新生中国になってからも、周恩来はその豊かな経験と才能をフルに發揮して、中国の外交面における第一線に立ってきたことは、周知のとおりである。周恩来の名声が、その外交的手腕によっていかに高く発揮されたのは、一九五〇年のモスクワにおける中ソ会談である。

中国革命に勝利した毛沢東は、一九四九年の二月にはじめてスターリンとモスクワで会談する

わけであるが、スターリンは毛沢東の期待に反し、

「毛沢東、おまえはなににきた」というような態度で冷遇し、中ソ友好同盟相互援助条約（中ソ条約）の交渉になかなか応じてくれないばかりか、不平等な要請をつきつけてきた。これには、スターリンがまだ国民党の蔣介石にかなり期待を持っていたとか、旧日本軍が満州に残してきた各種施設や資産を思うようにしたかったという思惑があったものと推測されている。

そこで急ぎよ、周恩来はモスクワに飛び、彼一流の交渉力と演出で毛沢東を助けて、難航を続けた中ソ会談をとりまとめるのに大きな役割を果たすわけである。

また、インドシナ休戦と朝鮮戦争休戦に関するジュネーブ会談が開かれた一九五四年には、周恩来はインドのネール首相との間に有名な「平和五原則」を発表し、これをもとに五五年には、第一回のアジア・アフリカ会議で積極的中立主義といわれる周恩来外交を打ち出して、アジア・アフリカ新興諸国に希望と新風を吹き込み、多くの人びとの共鳴と共感をさそった。

その後、スターリン批判が起き、東欧社会主義国に動揺が起こったときは、周恩来はすぐに東欧に飛び、権威が低下しつつある集団指導体制のソ連をバックアップしながら、社会主義諸国の再団結に非常に大きな役割を果たしたわけである。

国内においても、五八年に起きた人民公社大躍進政策についての党内闘争では、文革初期と同じような意味で是々否々の立場をとりつつ、その方向が定まるにつれて毛沢東支持の立場をとっ

て彭徳懐一派を追放する。

やがて中ソ関係が悪化してきた六〇年代からは、周恩来は劉少奇や鄧小平などのように直接ソ連とのケンカ相手に立つのではなく、また林彪のように激しい人民戦争の理論を振りかざすわけでもなく、むしろ中ソの軍事的な衝突を抑制する側に回り、六九年に急ぎよ、コスイギン首相と北京空港で会談し、中ソ危機を凍結させるというすぐれた外交手腕をみせる。

このようにみると、周恩来という人物は、内政面だけでなく外交的にも、毛沢東の非常に激しい政策がもたらすリアクションをモデレートなものにしながら、中国自身のナショナル・インタレスを考えていくという役割を果たしてきているわけである。

中ソ対立を凍結させた周恩来は、同時に一方において、「ニクソン・ドクトリン」以来のアメリカの対中接近というシグナルを受け止め、あの歴史的な米中会談を実現していくことになる。

従来までの中国の外交は、毛沢東型の民族解放闘争、なかでも武装闘争を最優先した革命外交であったが、周恩来は、いまの時期はもっと大人の外交をやることによって、中国の地位を国際社会の中に高めていくという国家外交へ転換させてきたといえよう。がゆえに、毛沢東型外交に忠実であった林彪の人民戦争理論と、その軍部の台頭に大きな抵抗感を持ったのではなからうか。そして、まさに毛沢東の承認のもとに、軍を一夜にして失墜させたのが林彪事件ではなからうかという気がしてくる。

## 遠大に計算された戦略的構想を胸に秘める周恩来

いずれにしても、周恩来は、いまの中国を背負って立っているキー・パーソンである。

周恩来の現実感覚からすれば、やはり台湾解放についてもそう急がないであろう。

アメリカは、周恩来のこのような外交の手の内を読み込んでいるからこそ、台湾については現状維持という政策を確立しているわけである。日本が台湾からいそいそと撤退したことをいいことに、最近では、アメリカは貿易でも実務においても台湾と実質的な関係をつくりあげ、同時に中国との外交関係を保っていくという巧みな外交を展開している。

私のだいたんな推測になるかもしれないが、今後の中国は、ほぼ前述してきたような周恩来の路線になっていくのではないかと思う。それは、周恩来は毛沢東と違って、中国のどの民衆からも広く支持されており、また多くの期待を集めているからである。香港に逃げてくる難民でさえ、毛沢東の批判はしても、周恩来の批判をする者はいないといわれる。

もし、「最後に笑う者は？」と問われれば、すぐれた現実感覚を持ち、多くの民衆からしられている周恩来であろう。つねに毛沢東の尻拭いしてきた周恩来は、まさにこのように遠大に計算された戦略的構想を胸に秘めて歩んでいるのかもしれない。